

リサイクル運動からリサイクル社会へ

Restructuring of Environmental Cycle



武田 信生*

Nobuo Takeda

廃棄物の問題が、単なるごみ問題からエネルギー・資源問題と結び付いた、極めて地球環境問題に密接な関係をもった問題と認識されるようになってきたことは廃棄物問題を扱ってきた一人として喜ぶべきことである。その廃棄物問題を論ずるときにリサイクルという言葉は現在非常に重要な地位を占めている。これは地球環境問題と結び付いた問題として考えたときに至極当然のことではある。“持続可能な開発”といったとき、「持続」させるためには常に元の状態に戻っていることが必要であるからである（元の状態に戻るという意味を厳密に論じる力が筆者にはないが）。

ところで、筆者は「リサイクル運動」と「リサイクル社会の構築」を分けて捉える必要があると感じている。両者は決して矛盾するものではないが、私たちが“持続可能な”地球を指向するときにはリサイクル社会の構築こそが重要であると考えるのである。リサイクル運動はどちらかといえば個人の倫理観に基づいており、熱心な個人が疲れてくれば、あるいは亡くなれば終わってしまうものである。また、リサイクルするために返って資源を浪費することも大いにあり得ることである。これに対して、リサイクル社会は個人の倫理観に関係なく、リサイクルが構造として確立されている社会である。

その昔、トイレは溜め式であり、農家の人が作物と交換に糞尿を回収にきて田畑に施用していたのは周知の通りである。立派なリサイクル社会が形成されていたわけである。このようなサイクルが形成されていても水域に流れ出すリンは、たとえば東京湾に流れ出していた。しかしそのリンは浅草海苔という形で回収され、また食卓にのぼっていたのである。いまや下水道が普及してこのようなシステムはなくなってしまっている。しかし、だからといって昔式の溜め式トイレに還えりたいという人もなからう。そうであるとしたら、

下水そのものあるいは下水の処理で発生する汚泥をリサイクルしていくことが現代におけるリサイクルの指向すべき内容であろう。ところで、下水道の普及には時間がかかり、今や合併処理浄化槽は性能がよいので下水道はやめて合併処理浄化槽を中心に据えるべきであるとの議論もある。しかし、合併処理浄化槽を維持管理するのは個人であり、永続性が保証されないのが最大の欠点である。筆者は合併処理浄化槽を使っているが、次にこの家に住む人間がこれを確実に維持管理していく保証がどこにあるのか。下水道の場合は社会そのものが公共の事業として（構造として）維持管理を続けていくのである。したがって、当面は合併処理浄化槽を利用することはよいが最終的な姿としては下水道が普及した社会の方が好ましいと考えるのである。現在、下水の処理は活性汚泥法によって下水中の有機性汚濁物質を生物体として固定化し、汚泥として回収する技術によっているのが主流であり、この方法自体は極めて合理的であるが、回収した汚泥を焼却してしまわなければならないところがリサイクルの観点から見ると残念なところである。食糧等の形で資源を海外から輸入してきたもののうち、ヒトが消化できないものを下水へ流す。下水を処理しなければ、河川、湖沼、海を著しく汚染することになる。そのために下水を処理するのであるが、回収した有機物は食糧を生産するために使われることはほとんどないのが実状である。これは、昔の溜め式トイレの時代には小さな地域のみでリサイクルが行われてきたのであるが、人間の活動範囲の広がりに応じて、より大きなサイクルが組み込まれなければならないにもかかわらず、そのサイクルが未だ閉じていないのである、と考えることができる。この状態は決して好ましいことではなくて、食糧輸出国の方では土地の荒廃を促進し、食糧輸入国の方では環境の汚染を深刻にさせる可能性を秘めているのである。グローバルな視点に立ったリサイクル社会の構築が望まれるのである。

* 京都大学工学部衛生工学科助教授
〒606-01 京都市左京区吉田本町